

BOOKS.  
私の書いた本

『女たちの本屋』



アルメディア 2266円

「自己表現のための空間」として書店を始めた10人の女性。彼女たちの物語から見えてくるものとは？



た だ じゅん こ  
多田 淳子

1963年徳島生まれ。専修大学文学部卒。出版業界の業界紙「新文化」編集部を経て、92年春よりフリーのライター兼編集者として活躍中。本書が初の著作。

撮影・増山武久

■書店Ⅱ自分を表現する空間

——副題に『表現としての書店』を實踐して』とありますが、このテーマはどのようにして？

多田 業界紙時代、よく書店の人たちにお話をうかがう機会があったんですが、みなさん、本当に本が好きな方ばかりなんです。いつも忙しくて肉体的にもつらいのに、自主的にフェアを企画したり、遅くまで残業して自分な

りのこだわりを持って棚作りをしたりして、自分を表現している。そういう舞台裏を知っていましたが、以前から「書店Ⅱ自己表現のための空間」ということは考えていたんです。

——10軒の書店はどうやって選んだのですか。

多田 まず、女性が代表となっていて書店を全国各地から60店ほどピックアップして、書店を始めた動機、仕事上での悩み、やりがい、夢などについて

のとおりだと思えましたね。

■人生へのアプローチがたくましい

——レファレンス・サービスを柱にした会員制の無店舗書店のシステムにはびっくりしました。

多田 明石の「ヒントブックス」さんですね。販売する本のほとんどが客注品で、受注は電話かファクス、お届けは配達か郵便、宅配便。「こういうことについて知りたい」って質問されたら、関連図書を紹介して、さらにそのテーマの講演会や映画の情報も提供する。家事や子育てを分担しながら、 pairwise やってらっしゃるんですが、パートナーシップは深まるっぽう。うらやましいかぎりでした。(笑)

——20代や30代の若さで始めた方も何人かいらっしやいましたね。

多田 スゴイですよ。でも、それを言うとき、「えっ、なにがスゴイの？」ってキョトンとされちゃって(笑)。取材を申しこんだときも、「なんで私のことなんか」っていう具合いなんです

よ。みなさん、さらりとしている。本が好きだから本屋さんになる、と動きだしたあとで、「あっ、こんな問題があったんだ。じゃあ、こうしよう」って、楽しみなが乗り越えてきた感じなんです。

家庭との両立にしても、そもそも「仕事VS家庭」という考え方を持っていないんですね。ただ、どちらも楽んでいる。それが周りからは両立していると思えるんだと思うんです。とにかく、人生へのアプローチがたくましく、ずいぶん勇気づけられました。読んでいただく方に、その勇気のおすそわけができればいいんですが。

\*

取材を始めてから完成まで1年半。何回も書き直したという文章からは、多田さんのあたたかい人柄が伝わってくる。そして勇敢に、自分に誠実に生きていく女性たちのあっぱれなこと！自分の可能性を信じたくなる、そんな本です。

(聞き手・岡田尚子)

た方のほうが、「自己表現の場」としてのお話をより明快にお聞きできるんじゃないかと思っただけです。資金はどうしたのかな、っていう興味もありましたし。あとは、なるべくさまざまなタイプの書店を紹介できるようにと考えました。

——児童書専門店、マンガ専門店、喫茶室のある書店、主婦が共同経営する書店、どの書店も個性的でしたね。

多田 小さな書店が生き残っていくには、専門店化するか、もしくは、もう一度来たいと思われるような居心地のいい空間を作るしかないって、みなさん、思ってたっしやるんです。実際、そのための努力はすごく、ご自分の好みや考えを明確に打ち出しているし、お客さまとの関係も大切に育てている。独自の情報紙や書店紙を作ってネットワーク作りにかいたり、イベントを企画したり。「小さな商売でも工夫と熱意だけでなんとかなる。本当のやる気さえあればできる」と話してくださった方があったんですが、そ